

医家随想



北京大学キャンパス春秋

津 谷 喜一郎

明朝発表のスライドがまだできていないがまあよいだろう。すこしキャンパス内を散歩してみよう。その方がよいアイデアが浮かぶかもしれない。

北京大学メインキャンパス内のこのホテルは周りに店がない。今日の会議があった医学部キャンパスのまわりは、日本と同じで大学病院関係者や患者家族相手の店がならびそこで果物などを買ってきた。

重いのでクロークに預けて、メインキャンパスの散歩をしよう。ところが、食

ることができないとの由。日本ではそういう経験がないがそういうものか。

いったん部屋に戻り荷物を置いてから、ホテルのボーイに聞いて池の方へ向かう。多くの学生が何組に分かれてサッカーをしている運動場の角を曲がると池へ着けるようだ。その角で台車で焼き栗を売っている。おいしそうだ。ところが注文して払う段になって、現金をもってくるのを忘れていたのを思い出した。ややためらったが、ここで食べ損ねると後悔するかもしれない。また五分ほどかかってホテルの部屋に戻る。

ホテル出口へ向かってレセプションの前を通るときに、ここは大学内なのだからキャンパスマップがあるかもしれない

と思い聞いてみた。これかといつてできたのは、このホテルの位置が書いてあるホテルの名刺サイズのカードだ。いくらか時間がかかったが彼のファイルからキャンパスマップがようやく出てきた。英語はあまり伝わらないがサービスピ精神はあるようだ。

未名湖と書いてある。今年の五月にもこのキャンパスに来たことを思い出した。さきの焼き栗のおばさんは私の顔を見ると待ってましたと笑顔を見せる。十元分だけくれというと、電卓で計算してすでに袋詰めしたのから、数個の栗を減らす。おなかのすいたエリート学生相手の商売だろうから、厳密に計算しているのかな。

栗は大きく大変おいしい。もぐもぐいくつも食べながら歩いていると、冬眠前のクマになったような気がしてくる。そういえば五月には柳条が舞っていた。そして五月の日差しの中で、五四運動九十一周年を記念する縦長の旗がキャンパス

内の道路にそって多くつりさげられており（写真真）、歴史の教科書にあった北



京大学で始まったこの運動と日中関係の歴史とが目前で合流するような印象もあった。今回の秋の出張も快晴が続き、天気には恵まれているようだ。懐かし石造りの十層の塔の脇にでる。懐かしい。夕暮なのに結構人がいる。やはり観

光名所なのだろう。

ひとわたり見た後、マップの北側に、円明園に続いていているらしい鏡春園の近くまで行ってみようと思いつく。そちらの方面では工事をしているらしい。少し暗くなってきたがまあよいだろう。暗さの増した路を行くと、古風な中国風の門がある。脇の小さい部屋に少女と男性がいる。門番の家族なのだろう。門の中に入つていかと聞くと少し考えて了承する。

中へ入る建物の壁にMBAとある。なんとここは北京大学の行っているMBAのコースが開催されている建物なのだ。

中国風の赤と緑の色で、細工のついた欄間のようなものついた回廊が続き、ところどころに古風なお寺の講堂のような建物がある。なかに電気がついて授業をしているようだ。のぞいてみよう。回廊からはずれてそちらに向かう。このようなお寺の雰囲気の中で講義は、以前WHO勤務時にラオスのビエンチャンで、Unicefと共同で開催した僧侶に対する

伝統医学の教育のコースを見学したとき以来だ。24年昔だ。そのときは黄色い僧医を着た教師役の僧侶が本を手にかかを読み上げ、若い僧が黙って聞いていた。

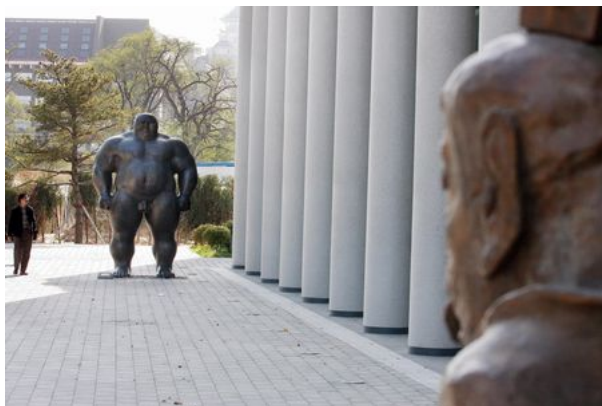
今回の北京でのこのコースはPower-Pointと液晶プロジェクターを用いてカラフルなスライドを用いて授業をしている。受講生は成人が多いようだ。門の前に何台もの自家用車が止めてあったが、企業経営者などがこのMBAのコースに参加しているのだろう。落ち着いた清朝風の建物と、明るい内部とスライドを映すスクリーンが全く対照的である。

日本でMBA(Master of Business Administration, 経営学管理修士)なるものが話題になったのは1990年代である。スタンフォードやハーバードなど海外でMBAを得てくるのが流行り、日本でも一部の大学が開校した。文系出身の受講生が多かった。

わたしの大学には中国人留学生も多い。わたしの研究室の昨年3月の卒業生の一

人は大変優秀な中国人女子学生であった。薬学系研究科の大学院へ進むかと思っていたら、ゴールドマン・サックス証券に就職した。MBAをとらないのか、と聞くと、必要になったら米国で取るとの由。または本年三月卒業の二人の学生は双方とも中国人であった。やはり優秀で、こちらは工学系研究科の大学院でMOT (Management of Technology) のコースへ進学した。技術経営戦略学とも称するよっだ。理工系大学院生でマネージメントに関心のあるものの進む最新のコースということになるのだろう。こうして自分の道を自分で切り開いていく生き方は、多くの日本人学生とは異なるところだ。

先の運動場の脇を通ってホテルへの帰途につく。さすがのサッカー好きの学生もボールが見えなくなり帰り支度をしている。新しいビルの前を通る。「光華管理学院」とある。なるほど「Business School」の名前だ。先ほどの古風な中国風の建物もこの学院に属すのだろう。



ビルの中に入って教室のドアを開けると、まだ授業をしている。緩やかな傾斜のある教室で討論がしやすい形だ。ホールのような部屋に案内のパンフレットが何種類かおいてある。手に取ると、ソウル大学、一橋大学と提携したコースとある。

東大経済学部はマルクス経済学が強い時期が続き、米国へ留学する者も少なく、日本のカウンターパートは東大ではなく、一橋大学になったのだろう。

ビルの前に三メートルほどの大きな黒い立像がある。暗くてよく見えないが台座のところに小さく「蒙古漢一」とある。たしかに目つきはモンゴル人だ。朝青龍に似ている。彼をモデルにしたのかもしれない。ただし、ふんどしはしていません。性器がむきだしだした(写真上)。

少し離れて対面した形で、もう一つ像がある。古代の学者風だが、舌をだしてアカンベーをしている。こちらは「剛柔之道―老子像」とある。「もつともらしい講義をするが、その内容は確定したものではないのだよ。そんなものをありがたがつてはいけないよ」と老子が言っているそう。

明日の講演のスライドを作る元気がいからか出てきた。

一ノ倉沢追想

出来尚史

いつかは書かなくてはならない。そう思いながら四十年の月日が過ぎた。記憶は風化しつつある。今をおいてもう機会を訪れまい。手元に残る二枚の写真を見ながら話を進めることにしたい。

一枚目は谷川岳一ノ倉沢の写真だ。モノクロームで色調は暗い。垂直に切り立った壁や鋭い岩稜、そして急峻なルンゼ。濃い霧が国境稜線を覆い、ただでさえ陰鬱な谷が凄みを帯びて迫る。名にし負う「魔の山」である。

もう一枚には山の会の仲間が写っている。総勢十三名、谷川岳集中山行の時のものだ。登攀を終えてザイルを解いたばかり。皆のほっとした表情が素晴らしい。疲れているはずだが、この時はやはり達成の喜びが勝っている。笑い声まで聞こえてきそうな写真だ。

隅の方にS君がいる。一人だけ横を向いて、何か物思いに沈んでいるようだ。折角の集合写真だから前を向けばよかったのに、と今だから思う。だがこの時は、誰が横を向こうが後ろを向こうが、特別気にすることもなかった。

S君は我らが山岳会のホープだった。入会してまだ日が浅かったが、既に十分な経験を積んでいた。なかんづく人工登攀は巧みで、会の中ではトップレベルとの評価を受けていた。謙虚で温厚な人柄ゆえ周囲からの信頼も厚かった。なにごともし起きなければ、その後次々と自己の登攀記録を伸ばし、かつリーダーの一人として会を隆盛に導く原動力となっていたことだろう。

それは突然やってきた。一ノ倉沢コップ状岩壁でS君が遭難したのである。この写真を撮ってわずか十カ月後、一九六九年五月のことであった。

私は遠く離れた名古屋で彼の訃報を聞いた。その時私は仕事の関係で東京を離

れていたのだ。知らせを受けて真つ先に頭に浮かんだのが「なぜ彼が？」という疑問だった。コップ状岩壁は確かに日本でも指折りの難所である。それでも決して、彼の能力に余るような所ではなかったはずだ。しかもその日のパートナーはベテランのY君だったという。この二人のパートナーに遭難の二文字を結びつけることは難しかった。いったい何が起きたのか。

上京してあらまし事情が分かった。事故当日二人が遭難したのは、急激な気候の変化でも、ハーケンの脱落でもなかった。大量の落石だったのだ。休日の岩壁には複数のパートナーが取り付いている。安全を考慮して先行パートナーから十分な間隔を置くのが常識だ。その時も彼らは登攀開始のタイミングを計りつつ、壁の下で待機していたらしい。そこを岩塊が襲った。

S君は下肢に、Y君は肩に直撃を受けて倒れた。より重傷だったのはS君であ

った。岩壁の取り付きから一ノ倉出合までは遠い。しかも岩場の連続である。彼は搬送される途中で息を引き取った。後の検死報告では出血多量が原因とのことであった。さぞかし無念だったろう、と思う。純粹な意味での登攀中の死ではない。順番を待っている間の死である。どのような死であれ山での死は同じである。とは私には思えなかった。何ともやりきれない気持ちであった。

明くる年、山の会でS君の追悼山行を催した。白毛門。湯檜曾川を挟んで谷川連峰に正対する山である。雪を踏んで私達は頂上に立った。眼前に望む一ノ倉沢にも多量の雪が詰まっていた。コップの底の雪は例年よりも厚い。誰もが無言でそれを見つめていた。

その山行にはOさんも参加していた。楚々たる美人で、会のマドンナ的存在である。私は彼女の携えたピッケルに目を留めた。頑丈なブレード、使い込まれたシャフト。どう考えても彼女の雰囲気

は似合わない。

「いいピッケルだね」

声をかけると彼女は戸惑ったような表情を見せ、「ええと小さく頷いた。話はそので途切れた。

帰途、他のメンバーからOさんがS君と婚約していたこと、ピッケルは彼の遺品であることを聞かされた。私は己の軽率さを恥じた。

事故ののち山の会の活動は生彩を欠いた。大手術に耐え生き延びたY君は二度と戦線に戻らなかつた。主力の二人なしでは士気は上がらない。

より困難な、より高度なものを追求するのが登山の本質だとしたら、死の危険は常に付きまとうと考えねばならない。それを意識するかどうかは人それぞれ異なるだろう。また、どのようなスタンスで山に臨むか、ということも極めて個人的な問題に違いない。会の仲間がこの事故をどのように捉え、何を感じたかは私にはわからなかつた。ただ言えるのは、

S君が私達の心に、容易に答への出ない課題を残していったということだ。

ある者は会を去り、ある者は先鋭的な登山を続けるべく他の山岳会に移った。私はしばらく単独で行動していたが、いつとはなしに山から足が遠のくようになっていた。

十月のある日、土合の駅から一ノ倉沢へと歩いた。旧道沿いの木々は色づき始めたばかりだった。山道を回り込み、四十年ぶりに岩の殿堂と向き合つた。壁は予想していたよりはるかに高く、険しく、威圧的に見えた。私が歳をとつたせいかもしれない。

出合から少しばかり沢を溯り、衝立岩の正面とコップ状岩壁を見上げる位置に立つた。一ノ倉の岩は穂高や剣岳のそれよりも白っぽい感じがする。長年にわたつて風雪に晒された岩は脆い。壁全体が今にも崩れ落ちてきそうだった。風はなかつた。今日は誰も岩壁に取り付いてい

ない。

「人が登る所とは思えないわね」

同行の妻がつぶやいた。そう、それは正しい。しかしそれでも、人は登るのだ。

技術を磨き、胆力を練り、全知を傾けて岩壁に挑む。

いつだったか忘れたが、ある雑誌の中に「岩と人との対話」という記載を見たことがある。いやいや、岩は何も語りはしない。まして数百もの命を飲み込んだ魔性の岩だ。語るとすれば、それはやはり人だろう。しかしいったい何を、誰に語るというのか。

稜線を隠していた霧が少しだけ晴れ、シンセン岩峰から陽が覗いた。驚くほどの明るさで光の幕が衝立岩の正面を照らす。余った光の粒がいくつか零れてコップ状岩壁に届いた。神々しいまでのその光景の中に、私は一瞬、S君の姿を見たような気がした。アブミを踏み換え、オーバーハングを乗り越えて、永遠の高みへと攀じて行くS君の姿を――。

ほおずき

水田 正能

先日、外来の受付の花瓶をふと見ると「ほおずき」によく似た実をつけた枝が刺してあった。看護助手がこれはほおずきでしょうか、と聞くので、よくわからないがこの枝は産婦人科の受付にはふさわしくないよ、と答えたら怪訝そうな顔だった。それも無理はない。

鬼灯、酸漿と書くほおずきは、ナス科の多年草で七月初旬に浅草寺で開かれる“ほおずき市”が有名である。観賞用としても人気があり、だれでも一見して解る実をつける。

なぜ、ほおずきが産婦人科にふさわしくないかといえは、有史以来、望まない妊娠を中絶する方法として、いろいろの手段があった。1600年頃の中世のヨーロッパでは、医学的また

は自然のメカニズムを利用した、200種類もの避妊や墮胎方法が一般的だった。セリエという人の記録では、1660年からの20年間に13,000人もの嬰兒が中絶されたそうである。

日本でも、江戸時代に佐藤信淵が上総地方の戸数10万に対し、2〜3万の墮胎が行われていたと書いている。『間引きと水子』千葉徳爾著。農山漁村文化協会。

墮胎の具体的方法としては、①薬物による子宮収縮の誘発②薬物により胎児死亡を起こし、自然死産を期待する③ブジーとして道具を子宮内に挿入して子宮収縮を誘発する④鋭利な道具を挿入して破水を起こす⑤腹部を圧迫・打撲などで胎児を死亡させ子宮収縮を誘発する、などでしよう。

有名な中将流には水銀を使った墮胎薬がありますが、庶民は、ほおずきの根・やつぶさ・とうがらし・椎の実・山ごぼうなどの煎じた物を飲んだり、

変わったところでは、猿の頭を煎じて飲むという地方もあったそうです。食物としては、芥子や大根の辛い部分・いちいの実・こんにやく・するめ・たこも効力があるといわれました。

機械的方法でもほおずきの根がよく用いられたようですが、細長く鋭利なものであればよいと、竹箸・竹ぼうきの竹、かんざしの針などを突き刺す。さらに子宮に突き刺したまま、糸で大腿部に結びつけ、しばらくそのまま放置しておくという地域もあったとあります。『日本民俗文化大系』、小学館

先日、医師が交際相手を不同意墮胎したとの事件がありました。かつての女性はやむにやまれず、墮胎を必要としたのです。廓での女性のつらい思いを、竹内智恵子さんがこのように書いています。

遣り手に願わば、ホレお銭取られますでしょ。借金したあげく、遣り手の世話になつて鬼追い致しましたんけど、

青梅の毒で体がヤワになつた所にヤレ煎じ葉や、ヤレお秘所から例のシビレ薬を流しこむわで、体が二貫匁も細うなつて、鬼追いするにきばる力も無うなつて、私までテコに使われ、腹帯をあらん限りの力でしめて上の方から如々に鬼子を追いつめ外に出すまで、えろう時間がかかり……。『鬼灯火の実』は赤いよ』未来社

ほおずきの赤い実をみると、水子への魂をみるような気がしてくるので、産婦人科の外來からは片づけてくれるようにお願いしました。

冬のミステリー

渡辺 玲子

なんとなく日々を過して、幸福とはこんなものか、と思つたりしてきた。

だが、暖房の効いた部屋で、お笑い番組ばかりを眺めていると、ヒヤツとするようなものへの欲求も起こつてくるよう

だ。

そういえば子どものころ、蚊帳の中で怖い話を聞いて怯えた記憶がある。昔は夏場に、怖い映画やテレビ番組が多かつた。あれは季節感を伴う、日本的な現象なのだろうか。

ところが、その季節感なるものが乱れてしまつた。ミステリーは英国風に暖炉のままで読むのが似つかわしいのかもしれない。

伝統的な『東海道四谷怪談』などに接する機会は少なくなつたが、ある種の存在理由存在理由でも持つているのか、演劇界では、それなりの対策を練つていたようである。

芝居の情報紙に、劇団民芸の裏版・四谷怪談『どろんどろん』というのが出ていた。あの怪談が初演されたときの裏側を、大道具師に焦点を当てて演じたものだ。

大滝秀治が演じた鶴屋南北の『四谷怪

『談』は、もともと五幕の世話もので、文政八年に江戸中村座で初演したとき、一番に『仮名手本忠臣蔵』を置いて、二番目狂言としてこれを出した。

だから当時の習慣で『忠臣蔵』の人物に重なり、塩谷判官(赤穂城主浅野長矩)が『四谷怪談』の主人公、塩谷家の浪人・民谷伊右衛門になるわけだ。その男は、産後の肥立ちの悪い妻のお岩を毒殺し、家伝の薬を盗んだ小仏小平も斬殺して密通とみせかけ、戸板の裏表に釘付けして川に流す。

ところで、隠し堀で釣りをしていた伊右衛門のまえに戸板が流れ着き、二人の亡霊が現れて山場を作る。

忠臣蔵の討ち入りは冬だが、渡辺啓助には『北海道四谷怪談』という、昭和九年の『ぶろふいる』に載った、冬場にも通じるミステリーがある。粗筋を述べてみよう――。

師匠(香織三十郎)の子で、子役をこ

なしている『私・ミイ坊』は、ある楽屋で顔掩えをしてもらっているとき、女優の香月珊瑚から、「あの人は本当の父ツちゃんじゃあない」という話を聞かされた。

日本最北端のシムシュ島で、ともにマドロスだった実の父親は師匠に殺され、香織は美人の母親を奪ったうえ、お金がなくになると叩き出してしまったのだ。

やがて落ちぶれた三十郎は旅役者になり、『私』もいつしか青年俳優になつていった。そして網走海岸の寂れた町で、ある缶詰工場の従業員慰安観劇会のために、新工夫の『四谷怪談』を演じることになる。

ところが労働争議が絡んだのか、社長夫妻が途中で姿を消したあと、殺人事件が発生する。この社長、もとは鮭工船の人夫で、悪辣な手段で押し上げていったのだ。香織十三郎のやり方に似ているのだが、役者が急病のため、お岩と小平次を社長夫妻がすることになった。そして、いわゆる「戸板返し」の場で、殺人事件

が起こるといわけだ。

謎解きの部分は割愛させて頂くが、要するに『私』が復讐を遂げたというもの。世間で事件が忘れられようとしたころ、香織三十郎の溺死体が阿寒湖から上がった……。

ミステリーにしるホラーにしる、怖い話は多少とも風土との関わりがある。蚊帳の中にフランケンシュタインやドラキユラがいたのでは、サマになるまい。

気候の温暖な瀬戸内海沿岸地帯に住んでいると、怨念の話はときに聞くとしても、例えば雪女に会うことにはないし、虎落^{とらおち}笛^{ふえ}を聞く機会もほとんどないだろう。それで、台風・豪雪・異常気象だけでなく、地震などの危険に思いを致すことも少なくなつた。危機への意識が欠けてきたのである。

しかし怖いのは、自然現象や個人的な恨みからの殺人事件だけではなからう。いきなりミサイルが飛んでくるようなこ

とは、ないであろうか？ 平和ボケで地獄を忘れたのではあるまいか。

この手のヒヤツとする話なら、もちろん厭だ。しかし、その点からすると伝統的な幽霊も、なんらかの意義を持つているかもしれないのである。

谷 敏行君の場合

田 村 豊 幸

昭和四年に栃木県真岡小学校へ入った私は、ときおり父親の転勤とともに新しく教室へ顔を出してくる、何人かの友人と出会った。彼らは一見して田舎の子と違っているので、すぐわかった。真岡弁でないうえに、運動靴と洋服で、動きも真岡の子のようにだらしなく着物を着ていることがなく、キビキビしていて、気のせいか、いつも転校生のほうが成績も良かったようにおぼえている。

小学校に近い所に住んでいたように思う「谷 敏行(としゆき)」と私がすぐ仲

よしになったのは、子供心にもいかにも聡明そうで少し色白な生徒に魅力を感じたせいだったのは、それまでの同級生と妙に気が合わず、青鼻を二本たらし、草履か下駄の在から来る人たちと仲よくなれず、独りでいることが多かったためだと思っ。

私は父の好みかクラスでただ一人長髪だったが、祖父が教員委員だったせいか、先生が注意してくれていたせいか、いじめられたおぼえはなかった。

小学校を出ると、私は母の実家、茨城県下妻の中学に入り、谷君は間もなくどこかへ転校したが、下妻へよく手紙をくれていたので、母の弟で下妻横丁で中彦という屋号の大きな呉服店をしていた小島敬蔵叔父は「谷ビンコウ君からだよ」と言っ、手紙を手わたしてくれたのも妙におぼえている。

私は下妻中学から日大へ入り、谷君は浦高へ入ってから東大工学部に入った。小学生の頃、二人で軍艦の設計図などか

いて遊んでいたのを忘れなかったのかもしれない。不思議なことに、工学部へ入ったのを知ったのは、私が日大で御茶ノ水駅の前でバツタリ会ったからで、戦争中は連絡が無かった。改めて学士会館で会って、海軍将校だったことを知った。

さらにしばらくして彼が肺癌のことを知り、丸山ワクチンをすすめたが、使わぬうちに亡くなった。

妙な因縁というのもまことに変な話だが、私はかつて「栃木県真岡町のこと」という本を書いたことがある。それを讀んだ、お父さんが真岡中学校の教師だった「栗山 実さん」という方が、内容にたいへん感動して手紙をくれたが、なんとその人は谷君の浦高の後輩で、一緒に陸上選手だったという。不思議なことである。

しかも、栗山さんはお父さんが私の妻秀の実家、真岡台町の磯貝米穀商の二階に下宿してお世話になっていたこともあるといって、私が地方で講演会があると

きに、たずねてくれて、谷先輩との話をしてくれたこともある。栗山さんは浦高から東大農学部へ行った。

そういうするうちに、私は不思議にも谷君は亡くなって東大島の極楽山西念寺に眠っていることを知り、義兄の磯貝実さんにつれて行ってもらい、お墓参りをしたところ、谷君のお父さんは、当時高崎の歩兵第十五連隊長をしていて、のちのアツツ島で戦死されたことがわかって驚悲した。

どう考えても、思い出せないのは、谷君が西念寺に眠っていることを誰から教えられたのか、わからないことである。栗山さんにきいても、私がそんなことを田村さんに伝えるはずがないという。谷君の魂がそれとなく教えてくれたのでもあろう。

墓石を見ると、平成六年四月十三日行年七十一歳とある。合掌しながら、彼は口元に小さいホクロがあったことを思い出して立ちつくしていた。

西念寺というお寺は、あとでご住職の井上まさ子様にかがったところ、天明(一七八〇)の頃、真岡地方が荒廢の極みに達し人影もないようになったので、越後から多数の移民に来てもらった。そのときお寺も一緒に移ったのが、この真宗大谷派極楽山西念寺であるという。谷君の谷も、この大谷の谷からの流れの旧家かもしれないが、たしかめることもできないうちに逝ってしまった。

私はいま老人ホームに収容されていて、手もとにはなにひとつ資料がなく、脳味噌を半分削られたような暮らしをしている。この文を書くにあたって、自宅にある地図のアツツ島を思い出していた。すると、また不思議なことに同人誌医家芸術秋季号が送られてきたのを見たら、本年93歳の、当時陸軍軍医中尉の岩崎哲先生の「キスカ島からの生還」の題の話がのっており、その時の説明に地図もあったので転載させていただいた。

西念寺の墓石によると、陸軍少将谷弘

様が昭和十七年十一月十四日行年五十四歳で戦死されたことになっており、岩崎中尉は昭和十九年二月潜水艦でアツツ島の東のキスカ島に上陸されている。

米国軍はアツツ島を全滅させたあとキスカ島を攻撃したのである。

谷 敏行君をめぐる思い出は、昭和四年に巨大な御影石の真岡小学校の校門が建つのを、教室から見ていた尋常一年生の時にはじまって、平成六年に西念寺の墓碑に法名淨溪院釋叡敏居士とあるのを見るまで、夢の石に抱きついて号泣したい思いである。

今は平成二十二年十月七日(執筆時)である。

真岡小学校の上空も西念寺の上空も、翺雲が北へ北へと流れている頃かもしれない。

雲を見つめていると、村の火の見櫓がいまにも倒れそうな気がするが、谷君の想いも、あれに近いのだ。

開業ABC (xvi)

中村雄彦

A氏との対話

2010年GWの短い休み、私は生まれ故郷東京に里帰りし、娘一家と過ごした。日頃親しくしている薬剤師と会食し、帰りの車中家に着くまで一緒に話した。

彼は未だ若い、既に調剤薬局を十数店経営する実業家である。15年来の付き合いだが、私は初対面でひとかどの人物と直ぐに見抜いた。何よりも世間一般を見通す視野がある。人の気をそらさない気配りのよさがある。私は人付き合いが悪く、必要なこと以外は殆ど喋らないが、彼とは特別、要らないことまで長々と話す。よく聞いてくれる。

この気配りは従業員に対しても同様である。今回も一人の薬剤師が緊急手術する状態となった。彼は忙しい日程を割いて即日病院に駆けつける。中小企業の経

営者は使用人の1人1人に細かく気を使うが、彼は人一倍それが厚い、性格によるのである。成功者である。私は年齢と共に、診療時間を制限し、従業員の勤務時間も短縮したが、それでも百人の患者を診る。「アシスタントは最重要として大切にしろ」というと、大いに感心し賛意を示した。

私もこれまで多少なりとも色々な人物と接触があった。学者はもとより、大会社の社長や芸術家もいた。中で最も頭の良い方は、なお、お元気なので名前は伏すが同業のM先生。東大卒、医学部の助教までされた開業医である。以前某皮膚科学術誌の企画で「接触アレルギーについて中村医師に聞く」というテーマで対談したが、穏やかな口調で要点を隙無く質問される。つられてこちらも口が軽くなる。当方の頭脳まで進歩したようである。有意義な時を過ごせた。

私の母校、新潟県トップの進学校、県立新潟高校には戦後の就職難か、理系も

文系も東大卒の先生が大勢いた。優秀な頭脳に接する機会は沢山あったはずだが、人見知りか、激しく個人的に親しくなれた先生はいなかった。惜しいチャンスをつぶしたと思うが、失礼ながらそれほどの人物はいなかったともいえる。

以下車中で彼との話の内容を中心に進める。

40数年前、大学紛争の時、東大生だったと思うが教授に向かつて「お前たちは専門馬鹿に過ぎない」といったら、言われた教授はすかさず学生に「お前たちは只の馬鹿だ」と返したと聞いたが、学生は教授から見れば只の馬鹿であろう。馬鹿にも順番はあるがスタートは同じである。卒後はもっぱら自分が頼りになる。

この時の教授は、学生は今が出发点、これからが大切、渾身練習が必要といったと私は解釈する。

彼の子息が親の期待を裏切って、地元高校から大学の哲学科を選んだのに私



軽井沢・万平ホテルで（昭和47年8月）

は大いに賛意を表した。単に物珍しさからではない。哲学は文系、理系と関係なく学問の基礎である。デカルト、カントを読めと私は最初に書いた。昔の角帽の四角の意味は国によって色々らしいが哲学は必ず入る。デカルトは古い人だが、数学者としても優れていた。こうなると理系も文系もない。哲学は学問の頂点、究極の学問である。大学の一般教養で哲

学を必修にすべきである。

高校の時の担任は東大哲学科出身で英語を教えていた。ごく平凡な教師で哲学の話など全くしない。しかし教養人としての風格はあつたと思う。私は高校時代の部活は哲学部だった。何を読み、感じたかは忘れたが、多少意識の中に哲学が残っているのかもしれない。

「先生は開業して40年を超えたといわれますが、よく続きますね」と彼。「日々の診療は一種の創作だ、平凡なようだが、毎回病気の診療は、それに相応しい作品を造ることだ、絵描きや造形家が連日作品に打ち込むのに似る、少しも退屈せず「ここまで来た」。続いて「先生は忙しいのに、勉強を始め、音楽、旅行など色々やりますね」と彼、以下普段通り彼のいうとおり私を先生にする。

「それは、自分にとって面白いことだけやり余計なことをしないからだ、ゴルフ、マージャンなどの勝負事は一切しない、詰まらない本は読まない、テレビは海外

ニュースとクラシック音楽が中心、詰まらないものはすぐに消す、やらないことが大切だ。それだけで随分時間が浮く、興味があるからやる、面白いからやる。

今は内外の新着雑誌で医学の最新の知識を得るのが、最も興味がある。遺伝子からGOD Like receptor など自己炎症性疾患関連の記事は面白かった。新型インフルエンザも大事だが、こうした深い内容の記事が最も興味がある。結局哲学的なものではないか。学問も煎じ詰めると哲学になる。貴方の会社でも定期的な専門医を招いて薬剤師達に話をしてもらっているが大変よいことだ、ご子息にその際前座に哲学の講義をさせてはどうか」と勧める。

車内販売のコカコーラを飲みながら、瓶を指して「トニックウォーターにあるキニーネ由来のキナ末による固定疹」の珍しい例を先月の皮膚科学会で報告した。医師はまず学会で発表する、そして権威ある学術誌に論文を出す。私はこうして

開業以来70題近い学芸発表をし、60篇近い学術論文を書いてきた。前にもいっただが、世界初、日本初の症例が9篇ある。いずれも現在貴重な報告とされ引用されている。大学研究室での業績を加えればもっと多いが、すべて余計な事をしなかつたためだ。話は尽きないが、目的地に着いた。近いうちの再会を約して駅で別れた。

コーハクかコハクか

ポーランド

隅坂修身

我が国では、お祝いの饗宴のお土産の一つに、紅白の餅を加えることがあるが、昔、大名や貴族は引き出物として、主人が来客に、庭に引き出した馬や、武具を贈ったこともあったとか。現代では、菓屋さんのノートやボールペンとは桁違い、これ程の物を贈る人は、よほどの下心があるだろ

うから、受けとる場合には心して、別荘暮らしも考えておいたほうがよからう。

国家公務員だった頃の思考パターンで、起りえない事を想像して、思い悩むのは浪費である。まさに、省エネの叫ばれている今、この様な行為は反逆罪に値すると密告されるだろうか？ 2009年9月に訪れたポーランドの二十世紀の中



頃には、まだ、スターリズムの嵐が吹き荒れ、監視、密告社会で、党幹部といえどもビクビクしていたとは嘘のようで、社会の変化は激しい。接する人々に活気は感じられたが、失業率は高く、貧富の格差が進んでいるらしい。

ワルシャワ郊外の骨董市風景
絵を制作中に母親同伴でモデル志願の女学生

この国は、ヨーロッパのやや中央に位置し、北海道と本州を合わせた程の広さで、美しい森と平原が広がり、樺太とほぼ同緯度にある。ワレサ元自主管理労組「連帯」議長、元大統領が電気工として働いていた、レーニン造船所があったのがバルト海に面したグダンスクである。そこには食らい付けば歯を痛めそうな硬

い紅白の餅ならぬ琥珀 (amber) の原石を山にした露店が、まるで焼き芋でも売るように店を連ねていた。

これは主に、女性の装身具として、専門店の店先を飾り、商品の種類の豊富さに驚いたが、ここには無い日本的な物として、根付の材料にはどうだろう。これをふんだんに使った部屋「琥珀の間」というのも聞いたことはあるが、未だ、お目にかかっていない。「よし！ 日本に持ち帰り、一山当てよう」と思いながらも、優先権は絵筆が持っていたので、遂に、そのチャン



クラブのホテルのフロント係 (ガイド曰くポーランド人が最も好む容貌だとか……)

スを逃してしまった。

この国は、2004年にUEにも加盟
 していて、通貨はユーロかと思いきや、
 この時はまだ、導入がなされていなかった。
 ホテルで出会った、日本からこの国
 へ毎月往復しているある家電メーカーの
 社員は、まだ、日本人に会うことは少な
 いと言っていた。国名の英語の発音が似

ていることから、オランダと間違えられ
 ることは、まだ許されそう。18世紀後半
 には、隣接するロシア、プロイセン、オ
 ーストリアによるポーランド分割に始ま
 り、123年間の国家消滅の憂き目も見
 ている。特にロシアは、ポーランドの目
 の上のたんこぶであった。

日露戦争では、東洋の小国日本が、巨
 大な軍事力を持つロシアに挑戦するなど
 という、一見、無謀な戦いに勝利した。

その頃、ポーランドの指導者は来日し、
 帝政ロシアからの解放の、武装蜂起援助
 工作もする近い存在となっていた。19
 19年分割時代の終わった時に、ヨーロ
 ッパ各国が拒んだ孤児765人を日本に
 預かり、元気にして帰国させている。阪
 神大震災の時、今度は、被災児30人が
 この国に招待されたそう、親日的な国
 である。

また、第二次世界大戦中、ポーランド
 からユダヤ人難民に、日本の通過ビザを
 リトアニアの杉原千畝(ちうね) 領事代

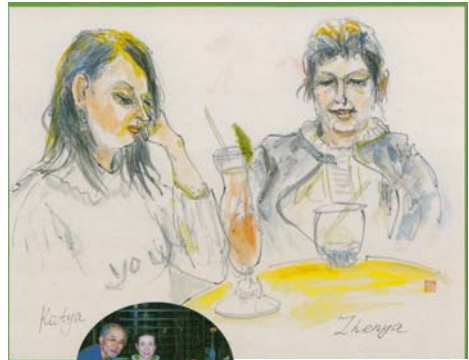
理が発給し、数千人の命を救ったことは、
 近年の新聞記事にもなった。それにして
 も、人間は惨い事をするものだ。虫も殺
 さぬブータンの生き方と対極にある。ア
 ウシビッツはこの国の南部、古都クラ
 フクの西方50キロメートルにある。ここ
 で見える光景は、まさに天国と地獄。殺さ
 れた人たちの毛髪、靴(子供の小さな靴
 も)、それに義足までもが、うずたかく積
 み上げられていた。髪は織物の原料とし
 たと聞き絶句。約70年前、ドイツのナチ
 スによって作られた、絶滅収容所の記憶
 は強烈であった。

この古都より南に、2000万年前の
 海が地殻変動で陸となり、海水が蒸発し
 て、塩の層だけが残った所がウイエリチ
 カである。この岩塩は昔、「白い金」と呼
 ばれ、この国の財源の三分の一を占めた
 らしい。エレベーターで100メートル
 ほど下りた岩塩坑内には、まさにツルハ
 シで掘り、馬に引かせる時代に、手塩に
 掛けて出来上がった巨大な礼拝堂、彫像

豪華なシャンデリアも、総て岩塩で作られていると説明を受けても、すぐには信じ難いほどで、自然の創造物はすごい！

その規模、多彩な結晶の輝きは、到底人間の及ぶ所ではない。人はそれを、有難く使わせて貰っているに過ぎない。香水や新薬も、自然の物を原料にしたり、そこから学びヒントを得て、人工的に製造しているものもある。それにしても、坑道を人間が7

00年間掘り進み、深さ300メートル、総延長300キロメートルにも及ぶとか、『手前味噌』という言葉があるが、『手前塩』は聞いたことがない。料理に凝るひとは、その土地により塩の味が異なること、重い岩塩を旅の先々で手に入れて、持ち帰り使うのだ。それに、「白い金」であれば一袋で、小さじ一杯でも、大きじならばなおさら、豪華な何十人分ものお土産にもなろう。



ワルシャワのホテルロビーでくつろぐロシア娘

(写真⑥の円内左端が筆者)

琥珀は摩擦で静電気を起こし、物を吸い付ける。付け回して離れないことの例えとして、「琥珀の塵」と言うらしいが、付け回すのは、もしかすると、お金かも？
日本のみなさん!! ポーランド生まれのシヨパンの『ポロネーズ』でも聴きながら、米寿、卒寿のお祝いに、紅白の餅より安全な、いい塩梅な琥珀にしてみませんか。老後の資産と、この国への経済貢献のために。

表紙の言葉

高橋 俊一

(東京都調布市)

「剣岳」

2009年12月31日、北アルプスの爺ヶ岳の山頂直下に暮営し、翌日の元旦の午前4時に鹿島槍ヶ岳に向かいました。稜線に出ると凄まじい風に徐々に体温が奪われ、身体の動きが極端に悪くなり、予定より大幅に遅れて冷池の冬季小屋に辿り着きました。小屋のなかで携帯ガスコンロに火をつけて簡易汁粉をつくり、ウイスキーと共に胃のなかに流し込むとやる気が再び湧いて登攀を再開でき、午前9時過ぎに山頂に到着しました。

正面に雲を突き抜けて剣岳が見えました。なかば這うように身体を低くして風によるブレを極力避け、ズームを使用して撮影しました。

(第40回医家写真展出品作品)

漢字はテンで難しい

豊泉 清

平成23年(2011年)は辛卯(かのと・う)という干支である。十二支の卯にはウサギが当てられており、年賀状には趣向を凝らした様々なウサギが描かれている。

ウサギの話題から真つ先に「二兔を追う者は一兔をも得ず」という格言が頭に浮かんだ。

Wer zwei Hasen auf einmal jagt, fangt keinen. (ドイツ語)

「二羽のウサギを同時に狩る者は一羽も捕らえない」

ウサギは四足動物だが、匹や頭ではなく、あたかも鳥のように一羽、二羽……と数える奇妙な言語習慣がある。

ドイツ語は飼うウサギを Kaninchen (カニンヒェン)、野ウサギを Hase (ハーゼ) のように異なる単語で表す。

Galgo que muchas liebres levanta, ninguna mata. (スペイン語)

「多くのウサギを追いたてる猟犬は一羽も殺さない」

猟犬が主語で、二羽でなく多数で、捕えないではなく殺さないと表現している。スペイン語も飼うウサギを conejo (コネホ)、野ウサギを liebre (リエブレ) のように別の単語で表す。

Chi due lepri caccia, l'una non piglia e l'altra lascia. (イタリア語)

「二羽のウサギを狩る者は、一方は捕らえられず、他方には逃げられる」

イタリア語も、やはり飼うウサギを coniglio (コニリオ)、野ウサギを lepre (リブレ) のように別の単語で表している。

ドイツ人やイタリア人やスペイン人は、飼うウサギと野ウサギを別種の動物と認識しているのだろうか。日本人には理解し難い言語感覚である。

二兔を追う者……に相当する格言が世界各国に存在する。欲張って二つのもの

を同時に求めると、結果的にどちらも失敗という教訓は万国共通である。欲張ったら却って損をした……という苦い経験をした者が、どの民族にもいる証拠であろう。

高校の授業で「狡兔死して良狗煮らる」という漢文を教わった。略して狡兔良狗とも言ふ。優れた猟犬もすばしい兔を狩り尽くすと、もう用無しとなって煮て食べられてしまふという原義で、戦争で功績を挙げた武将も、戦争が終わって平和な世の中になると、無用の長物として冷遇される。役立つ時だけ重用され、不要となれば捨て去られる冷酷さの比喩である。

漢和辞典によると、日本で使われている「兔」は俗字で、免に点を打った「兔」がウサギの正字である。中国では「兔」という正字を使っている。例えば「追一兔者不得一兔」が二兔を追う者……に相当する。前述の狡兔良狗も中国語では免死狗烹(ウサギが死ぬと犬を煮る)と表

現している。犬を煮るといふ表現から、古代中国では犬を食べる風習があったことが窺える。

兔の正字の「兔」は免許や免税の免と僅か点一つの違いである。「水」と「氷」や「又」と「叉」や「良」と「艮」もやはり僅か点一つで全く異なる漢字になる。卯に点を二つ加えると「卯」になる。

王の上に点を書くこと「主」になり、下に書くと「玉」になる。大も点を添える位置によって「犬」や「太」という別の漢字に変身する。

札や神や祥の「ネ」偏と、袖や袴や複や補の「ネ」偏も僅か一画違いでまことに紛らわしい字体である。昔は礼、神、祥のように「ネ」を「示」と書いたから「ネ」と識別し易い。

名前に祐と裕という字を書く友人がいる。お恥ずかしい次第だが、つい最近まで「祐」はネ(しめす)偏に右「裕」はネ(ころも偏)に谷の違いを明確に認識していなかった。

末と未や、土と土は横棒の長さの違いで全く別の漢字になる。漢文によく登場する日(いわく)は日とほぼ同じ字体だが、日は日より横幅が少し広い。

戊戌(つちのえ・いぬ)という干支がある。十二支のイヌには「戌」という字を当てる。「戌」に短い横棒を加えると「戌」になる。日常生活では減多にお目に掛からないが、「戌」の短い横棒を斜め右下に書く「戌」という漢字もある。戊戌は紛らわしさという点では横綱絞と思われる。

己巳(つちのと・み)という干支もある。十二支の巳はへびを表す。巳巳己の三文字は最後の筆画をどこから書き始めるかで異なる漢字になる。読み方や意味の違いを口調の快い和歌で暗記したい想いがある。

治療の治はシ(さんずい)で、冶金(やきん)の治は一画少ないシ(にすい)である。無風快晴の「晴」は日偏で、画竜点睛の「晴」は目偏である。賞味期限の

「味」は口偏で、読書三味の「味」は日偏である。日本酒の酒はシに酉と書き、駄洒落の酒はシに酉と書く。皿と皿、追と追、賢と賢、背と脊、遣と遺、盲と盲なども字体が酷似していて紛らわしい。

栽、裁、載、戴という漢字がある。左下の部分がそれぞれ木、衣、車、異、隹である。栽、裁、戴は「さい」と読み、戴は「たい」と読み、截は「せつ」と読む。直截(ちよくせつ)を「ちよくさい」と読む人もいる。截(せつ)と載(さい)の字画が酷似しているための誤読と思われる。

以上の観察からも明らかなように、漢字は点一つ、短い棒一本でも全く異なる読みや意味になる。私は漢字を図形と認識するのがよいと思っている。パソコン全盛時代は画面に表示される数千字の漢字を、眼で見て瞬時に識別する能力を訓練する必要がある。昔は「読み書き」と一語のように言っていたが、パソコン時代は手で字が書けなくても、画面に表示

される文字を正確に識別できれば、文書の作成が可能だから、とにかく「読み」の訓練に徹する方が有利である。私は視覚による数千種類の図形の識別という観点から漢字の勉強を楽しんでゐる。卯年の年頭に際し、免に点を打った「免」がウサギの正字という話題に端を発して、我流の考察を試みてみた。日頃から漢字はテンで難しいと感じている。

お見送り

浜名 新

「見送る」という言葉がある。岩波国語辞典には①人が去るまでつきそふ。イ、出発する人を送る「客を―」ロ、なきがらを墓地まで送っていく。ハ、死ぬときまで世話をする「親を―」。②、去つていくのを後ろからながめる「渡り鳥を―」。③、見ているだけで手をださない。「ボールを―」。そのままにして取りあげない。「採用を―」「機会を―」

私が勤めている療養型のK第2病院は終末期医療を担っている。平成18年の医療法の改正で、医療区分とADL（日常生活動作）の評価から診療報酬が決められた。急性期型病院から転院してくる老齢の患者は、引き続き医療対応を必要とする医療区分3・2の、診療報酬の高い点数の患者が中心となった。（後期）高齢者で重症患者が必然的に多くなり、短期間に亡くなる頻度が高くなった。しかし延命処置の1つである管栄養の人が入院患者の5〜6割を占めている現在、管栄養で入院4年、5年と長生きする人もおられる。生命の不思議である。

患者入院時に入院カンファランスが行われる。多職種のメンバーと、（患者・）家族が参加し、医療側から診療・ケアの概要を説明し、了解していただく。そして入院1週間後、患者の入院後の生活状況・検査結果・画像所見を披露し、入院診療計画書、DNR（心肺蘇生なし）の書類、看護計画、栄養管理などを説明し、

納得されて双方でサインをする。書類のコピーを家族に渡すのが決まりである。また、病棟別・担当医別に多職種の人たちと患者カンファランスが週1回行なわれ、異なる視点からの意見は有意義である。

重大な病状変化が出現した場合、患者側のキーパーソン（代表）と面談し、病状と治療の内容を説明し書面に残しコピーを渡している。情報の共有化である。症状には発熱・嘔吐・経皮的酸素飽和度の低下・摂食不良・尿量減少・表皮剥離・便秘などが多い。誤嚥性肺炎に細菌性肺炎の併発が多く死因の原因となる。潜在性尿感染の人は多い。腎機能低下と血圧低下で強心利尿剤（下・パミン塩酸塩注）を使用したりする。痰、尿の培養は欠かせない。ガン末期での疼痛緩和処置として麻薬の坐剤や貼付剤は欠かせない。

何らかの理由で病院から退院（死亡退院・在宅・他施設・病院）されるとき職員は患者・家族にお別れの挨拶を行う決

まりになっている。在宅、老健、病院へ転出する場合には表玄関口から車に移る。送る側の職員の気分は明るく、励ましの連発となる。一方、死亡退院の場合、裏門からの退出となる。医師が家族に死亡宣告する。駆けつけた家族は遺体と対面する。医師が死亡のいきさつを説明する。介護職員は遺体の旅立ちの装いをして霊安室へ安置する。家族は線香をあげる。ただしキリスト教信者では線香は禁忌だ。

連絡を受けて葬儀社の車が到着する。準備が整うと葬儀社の職員は遺体をストレッチャーに載せ霊安室から大型バンに移乗して故人（遺族）の自宅へ向かう。今までケアに携わった病棟の職員（看護師・介護士・担当医師）と病院の職員は通路に待機して「お見送り」をする。誰もが沈うつな表情をしている。遺族が職員にお礼の口上をする。葬儀社の職員は「これから遺体を自宅へお運びいたします」と述べる。車が動き出す。職員は車が門から見えなくなるまでお辞儀をし

て「お見送り」をする。この習慣は儀礼的とはいえ、一期一会の縁となった故人の尊厳を敬う礼節をわきまえた行為で、よい習慣である。夜中でも当直医・看護師・介護士で「お見送り」をする。「お見送り」は遺族に温かい感情と和みの気分を与えるに違いない。

3度目のサイパン戦跡

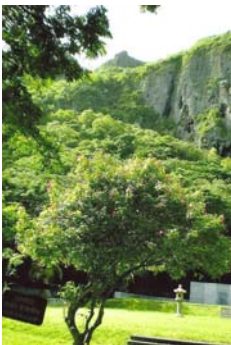
めぐり

(1)

美濃部 欽 平

2009年4月と2010年5月に、サイパン戦跡めぐりをして、医家芸術誌夏月号と秋月号の2回にわたり掲載させて頂いた。

今回、昨秋11月に3回目の戦跡めぐりをしてきた。第1回目は日本からわずか3時間余りで行ける常夏の島で、今は若者に人気のリゾート地であることや、話に聞くバンザイクリフと玉砕の島である事ぐらいの知識しかなかった



が、島の中には第二次世界大戦時代に残され、放置された多くの戦車や高射砲など、武器の残骸や戦跡が残されていて、戦友会や遺族の方が建立された慰霊碑（写真⑤）があり、今の日本国内では殆んど見る事ができない破壊されたまま、道路わきや草叢に残る戦争の傷跡をまのあたりにして、胸が一杯になった。

今回の訪問は、旧日本軍が最後の司令部を置いた、島北部の地獄谷とバンザイ突撃で玉砕したタナバクに行ってみたいというのが目的だった。

地獄谷とタナバクへの集結

日本軍が最後の司令部を置き、南雲忠

一海軍中将、斎藤

義次陸軍中将が自

決した地獄谷は、

サイパン島北部の

マツピ山南西マタ

ンサからタナバク

集落の西側の山際

の谷間の一帯にあたるという。このジャ



左側の案内標識には、漢字で「奉安殿」とあり、その下に英語でも（ガラパン）



マタンサ（現サンロケ）中心部にある教会



旧アメリカ軍の弾薬庫

日に地獄谷の壕内で司令官らが自決した翌日の7日未明、生き残った残存兵で戦闘可能な者、約3000人（この中には在留邦人の警備団員や青年団員もいた）が、マタンサに終結し、死を覚悟の最後の突撃へ向かって行った。

ングルの洞窟は最後の司令部が置かれたところだったというが、南雲中将の自決した場所については、なお諸説あるという。この同じ壕内で1944年7月6日に自決したとする説や、海軍と陸軍は各々別の洞窟で自決したという説、南雲中将は7日未明、突撃隊に加わりマタンサの海岸を4キロほど南下したが、アメリカ軍の機銃掃射を受け負傷し、500メートルほど離れた洞窟内で自決（石川元海軍兵長説）等あって、未だに最後の場所については特定できない。

以前は司令部壕内まで入る事ができた

というが、今は途中の土地がチャモロ人の私有地だったり、ジャングルが深く生い茂って地形も険しく、高齢の夫婦連れではとても入って行くことは出来ない。せめて、マタンサまで行って、司令部壕のあった地点を遠望するだけでも良いと思つて、ガイドの津田さんに案内してもらい、チャモロ人女性の運転する車でマタンサに向かった。

マタンサは現在サンロケと呼ばれている。北部最後の現地人の集落がある。戦前は、沖縄県出身者が多い町だったそうだ。サイパン戦末期の1944年7月6

66年前、日本軍の悲愴な出来事は今は遠く、私たちの訪れた小さな集落の中心地には、美しい黄色の教会が建つていて、緑濃い木立の中の住民の生活路には、鶏が散歩し、犬たちは道の真ん中に、ゆうゆう寝そべったままで、私たちの車が近づいても、動こうともしない。

後方の地獄谷に続く密林の山の上には、真つ白な雲を浮かべた抜けるような青空が眩しかった。66年前も、このようにのどかに暮らしていたチャモロ人たちを、関係のない戦争に巻き込んでしまったことを、サイパンに来てみて改めて知る事が出来た。

（つづく）